

偽りの美姫

M. M. M

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夕暮れの最中、AINZの命令で市街を歩く美貌の魔術師。そこに襲い掛かる暗殺者集団。誰が何のために美姫ナーベの命を狙つているのか。AINZとナーベラルは捜査を開始するも敵は陽動と隠蔽に長けた曲者たち。手がかりはラブレターと娼婦たちがナーベラルにひた隠す秘密?知恵を絞るナーベラル。策謀を練るAINZ。果たして黒幕は見つかるのか。

(話の都合上、D&Dから魔法を拝借してキャラクターに使わせてます。独自解釈だけど公式設定の範囲内だと思いたい。。。カクヨムにも投稿済み)

目

次

夕暮れの襲撃					
情報収集					
策略V S 策略					
事実誤認					
暴かれる偽り					
真実とその裏側					
	57	46	36	26	13
					1

夕暮れの襲撃

「これが私？」

大きな鏡の前に立つ女は恍惚としながら言つた。

周囲にいる派手な衣装を着た女たちも目を丸くし、「嘘みたい……」「本物そつくりだわ……」と口々に感想を述べる。

「こりやすい……魔法とは偉大なものだな……」

豪華な椅子に座る男は感嘆して言つた。

「いかが？ 金貨20枚でこの粉を譲つてあげる」

奇怪な儲け話を持ってきた女は微笑んで言つた。

「20枚、か」

面白い事を考えついたものだと店の経営者は感心した。
彼はすぐに損得勘定を始める。

この方法を使えばいつもの2倍の料金でも客は喜んで払うだろう。
3倍にすることも不可能ではない。金貨20枚ならすぐ元が取れる。
しかし、当然ながら危険もある。自分たちが取引しようとしている
粉は違法なものだ。見つかれば罰を受けるし、『あの女』と同業者たちを怒らせる事になる。それだけの価値があるだろうか。
「ばれた時が怖い？」

経営者の思考を読んだのか、女は言つた。

「麻薬と違つて小さな罰で済むでしょう？」

「いや、それはそうだが、あの人に知られたら……」

「報復があると？ むこうには何の不利益もないのだから心配いらぬい
わ。もちろん怒りはするでしょうけど、復讐したら返つてむこうの名
声が地に落ちる。違う？」

女は自信たっぷりに言う。

「確かに……」

経営者の脳内で天秤が傾く。

一瞬、この女からアイデアだけ盗み、この街にいる魔術師から安く
粉を仕入れたらどうかと考えた。しかし、話を持ち込むだけで密告さ
れるリスクがあつた。部外者であるこの女から買ったほうが安全で

あり、相手もそれをわかっているに違いない。

「……3倍の量で金貨5・6枚。どうだ？」

それを聞いて相手はふふつと笑つた。

「いいわ」

「交渉成立だな」

経営者は握手をした。

（客は共犯みたいなもんだから黙つてははずだ。こここの女たちも問題ない。そもそも誰も損をしないんだ。ちよつぴり魔法の力で金儲けをするだけさ……）

彼は肝が太かつた。ばれたら街中から顰蹙を買うだろうが元より人に褒められることなどない商売。重要なのはどれだけ金を稼げるかだつた。

彼は笑顔を作りながら商売を持ちかけてきた女に感謝した。
彼女の本当の目的には気づかずに。

斜陽が彼方の山脈にかかるつていた。

世界の果てから光を浴びて城塞都市エ・ランテルは黄金色に染まり、人々は長い影を連れて帰路に着く時間帯だつた。芸術家が思わず筆をとりそうなほど壮美な光景だつたが、下級市民の人々は感慨もなくただ家路を急ぐ。魔法の照明も持たない彼らに夕暮れを楽しむ余裕はない。黄金の時間が終われば暗黒の時間がやつてくるからだ。

防壁と多くの兵士に守られていようと人間は闇を恐れる。事実、闇夜の時間にモンスターの大群に襲われて滅んだ都市はいくつもあり、この都市もまたアンデッドの大群が発生してその一例に加わる寸前だつたのは誰もが記憶に新しい。

そんな憂いを帶びた人々と対照的に、闇こそ我が同胞というように優雅に歩く女が一人いた。その肌は真珠のように白く、対して髪と瞳は黒い。歩くたびにボニー・テールとローブの裾がゆれ、斜陽が照らす顔はエルフさえ見惚れるほど美しかつた。彼女の前に立つ者は男も女も恍惚となり、慌てて道を譲る。

それはいつもの光景。

しかし、今日だけは違っていた。

朱色のローブを来た男が彼女の前に立ちはだかつたのだ。
目には剣呑な光があつた。

「何？」

彼女は足を止め、美しくも鋭利な声で尋ねた。

相手は答えない。

彼女の周囲にいた人々は何事かと不安な顔になる。

男がついに口を開いた。

『睡眠』《スリープ》

魔法により周囲の人間がばたばたと倒れる。

突如として戦いの口火が切られ、彼女は殺戮の気を放つ。
そこにはこんな魔法が効くと思つてゐる相手への嘲笑と侮蔑も混ざつてゐる。一撃で終わらせようと右手を上げるが、殺さず情報を引き出すべきだろうと考え直した。

『静寂』《サイレンス》

敵の第二の呪文により無音の空間が周囲に広がつた。この中では声を上げて救助を呼ぶことはできず、魔法を使うには無詠唱形式を用いるしかない。しかし、これも彼女には意味がない。目の前のハエを殺さずに捕まえる方法を思いつき、実行した。

『人間種魅了』
チャームパーソン

相手の精神を操ろうと試みる。しかし、効いてゐる様子がない。

彼女は思つた。

（魔法か、マジックアイテム？面倒ね……）

その時、敵は予想外の魔法を使つた。

『水創生』
クリエイトウォーター

空中に水が生み出され、彼女に降り注ぐ。

彼女の反応は「は？」だつた。

酸や毒液ならわかる。肺の中を水で満たす魔法溺死《ドラウンド》にも対策をとつてゐる。しかし、ただの水はただの水だ。

体と周囲の地面がしどどに濡れるという当然の結果が訪れた。
（こいつ、何がしたいの？）

攻撃にもなっていない行為に彼女はただの狂人なのかと思い始めた。

しかし、そうではないと思い知った。周囲で眠っていると思い込んでいた人間3名が懐から奇妙な陶器を取り出し、彼女の足元へ投げつけたからだ。裏通りにしては人が多いと彼女が気づいていたかはわからない。

静寂の魔法がかかっているため陶器は無音で割れた。

中から飛び出たのは——雷。

治癒や補助魔法を液体に帯呪させるポーションが存在するなら攻撃魔法をこめることも可能だろう。

3つの陶器から生まれた白い雷撃は水を伝つて彼女を包む。その光景は無数の白い蛇に襲われるようであつた。

雷撃が終わると住人に偽装した殺し屋達はダガーを抜いて襲い掛かる。

殺せると彼らは確信した。

王国中に名前が轟く魔術師であろうと策を練ればこんなものだと。

しかし、彼らの策は致命的な間違이があつた。

《次元の移動》

標的は3人の前から消え、勝利の確信が混乱に変わつた。
あれだけ雷撃を受けて魔法を使えるはずがない。

電気属性を無効化する装備を常につけっていたのか。

すぐに街から逃げねばと3人が考えた時、無音の世界に声が生まれた。

「ぎゃああ！」

発生源は彼らの奇襲を援護したローブの男だつた。

3人は見た。彼の右胸が真っ赤に染まり、剣が突き出しているのを。

背後から刺すのが誰かは言うまでもない。

夕日に照らされ、黄金色に染まる殺戮者。奇妙なことに3人は驚愕と恐怖に包まれながらもその光景を「美しい」と思った。

それが彼らの最後だつた。

《魔法二重化・雷撃》

トリプレットマジック

ライトニング

貫通攻撃もある魔法に3人は貫かれ、死亡した。

「あなたはもう少し生きられるわ」

彼女は地面で悶絶する男に言った。

不機嫌だった。風や電気を含む空気《エア》系の攻撃と防御に特化した自分に雷撃魔法を使うなど本来なら爆笑ものの行為だが、不意を突かれたことは事実だった。別の属性攻撃ならダメージを受けていただろう。

「なぜ襲つてきたの？言ひなさい」

傷口を剣でぐりぐりとこじり、激痛を与える。

「ぎ……ぎやあああああ……」

悲鳴はそれほど大きくなかった。

痛みが強すぎると人間は声すら出せない。

男は激痛と引き換えに極めて珍しいものを見ることが許された。美しくも氷のように冷たいと噂の美姫がほんの少し頬を緩ませただ。

嗤つた。

彼女は嗤つていた。

「痛い？話せば助けてあげるわ」

もちろん大嘘だ。

それがわかっているのか、男は震える手で腰のベルトから白い筒を引き抜く。

その端には紐がついており、男はもう片方の手でそれを引き抜こうとした。

ぼきり。

腕を折られ、男はさらに悶絶した。

「鍊金術武器？他にもあるなら試してみたら」

彼女は愉快そうに言つた。

しかし、それに対しても苦痛に顔を歪めながら笑つた。

「いい……んだな……？」

彼は顎を勢いよく閉じ、口内で何かを噛み潰した。

「うつ！」

男の口と鼻からしゅうしゅうと白い煙が上がり、体が痙攣する。

二、三度体が揺れると男は動かなくなつた。

「……」

舌打ちが静かな空気を揺らした。

拷問や魔法で情報を引き出すことへの最大の対策をとられた。他の仲間を生かしておくべきだつたと悔やむが遅すぎる。

どうしようか思案しているとガシャガシャという鎧の音がした。金属鎧を鳴らしながら走つて来たのは長槍を持つ二人の衛兵だつた。二人一組で街を巡回していることを彼女は思い出す。

「ナーベ様、これはいつたい！」

「さきほど白い発光が見えたのですが？」

衛兵たちは驚愕を顔に貼り付けたまま聞いた。

「襲つてきたので殺しました」

彼女は簡潔に答える。

「彼ら全員を、ですか……？」

4つの死体を見て、二人の驚愕は恐怖に変わつた。元より一人で軍に匹敵するというアダマンタイト級冒険者だが、聞いて知ることと体験することは意味が違う。

「し、死体を確認しろ。身元がわかるようなものを探せ」

「は、はい……」

上司であろう兵士に命じられ、もう一人は死亡した暗殺者たちを調べ始めた。

「ナーベ様、何をしているのですか……？」

剣を腰から外し、ロープで鞘と柄をぐるぐる巻くという謎の行為をしている彼女を見て彼は不思議そうに尋ねた。それでは剣を鞘から抜けないだろうと。

「念のために」

彼女は奇妙な考え方をした。

「ナーベ様、こちらへ来て頂けますか？」

雷撃で死んだ男を調べている兵士が彼女を呼んだ。

何か見つけたのかとナーベラルはそちらへ行く。数歩進んだとき、

彼女の背中にぞわりとした感覚が生まれた。体をひねり、突き出された槍を紙一重で避ける。それを持つのはもう一人の衛兵——いや、彼らは衛兵などではなかつた。

(やつぱりグルだつたわね……)

聰明な冒険者なら戦闘が終わつた途端に巡回中の衛兵が現れるなど都合が良すぎると思つたかもしれない。あるいは警笛で仲間を呼ばないのはおかしいと。

彼女はどちらでもない。

最初から人間など信じていなかつた。

「はあっ！」

彼女は偽兵士の懷に踏み込み、このために用意した鞘つきの剣を振つた。力任せのフルスイングだ。オーガに殴られたように兵士の体が吹き飛び、民家の石壁にめり込んだ。反作用により少し体勢を崩すが、もう一人の兵士は攻撃してこない。

おや、と彼女が思つて見ると敵はぽかんとしていた。

「な……何なんだ、お前は……？ 魔術師じやないのか……？」

「何、そのゴミみたいな質問は？」

彼女は聞き返した。

敵が混乱の極致にあつたのは常識からすれば仕方なかつた。

どんな魔術師でも接近戦になれば非常に脆い。だからこそ戦いでは仲間に守られながら決して前衛に出ず、たとえ帝国の生きる伝説、フルーダ・パラダインであろうと多くの護衛をつけて移動する。刃物を所持する魔術師もいるが、あくまで緊急時のためであり、お守りに近い。

では、オーガの如く接近戦をこなせる魔術師はどう戦えばいいのか。

答えは一つ。打つ手はない。

『チャームパーソン
人間種魅了』

彼女は今度こそと思い、残つた男を無力化しようとする。
相手の手から槍が落ち、瞳に膜がかかり始める。
いけると彼女は思つた。

しかし、それが完了する直前に敵は最後の力を振り絞つて口内の何かを噛み、口と鼻から白い煙を出して倒れた。

「つーこいつも！」

彼女は壁にめり込んだ最後の一人に近づくが、その男も打つ手なしと悟つたらしく、すでに口から白い煙を出して絶命していた。

この場で生きているのは影さえ美しい魔術師だけだ。

「虫けらどもが……」

恐ろしく冷たい声が響き、斜陽は逃げるよう山脈のむこうへ沈んでいった。

殺戮の加害者とも被害者ともいえぬ美女が立ち去ると近くにあつた建物から3対の目がそれを追いかけ、しばらく放心状態が続いた。

「すげえ……」

坊主頭の大男がぽつりとつぶやく。

「すごいなんてもんじやないぞ。アダマンタイト級冒険者ってのはどれもあんな化け物なのか？」

短髪の男が揶揄の混じった賞賛を送つた。

「なあ、あの一撃を見たろ？ 魔術師にあんなことができるのか？ それともお前みたいに神官戦士なのか？」

「それはねえぜ」

問われた大男は断言した。

戦士と間違われることが多い彼は信仰の元に日々の鍛錬を行う信仰系魔法詠唱者だった。

「使つた魔法を見ただろ？ あいつは間違なくシユラと同じ魔力系だ。そうだろ？ おーい？」

一人だけ放心状態が終わつてない小柄の男に大男は聞いた。

「…………ええ、そのはずです。第3位階の雷撃を3重化するなんて。あれで魔力系じやなかつたらモンスターですよ」

シユラと呼ばれた男の声は感嘆よりも恐怖が濃かつた。

「じゃあ、どんな手を使つてる？ 強化系の魔法？ それとも魔法のかかつた装備か？ 呪いつて事はないと思うが。いやー、すごいものが見

られたな

短髪の戦士は面白そうに分析し始めた。

「装備の力だと思います。身体強化の魔法を使ってた様子はありません。よほど高価なものでしようね」

「すげえなあ。とびきりの才能の財力か。強さの頂点ってのはわかっていてたが、いよいよ自信なくしたぜ。とつくに冒険者の道はあきらめたけどよお……」

大男はため息をつき、花が萎れるように頭を下げた。

彼らはかつて冒険者を目指したワーカーであつた。冒険者なら街中で同業者が襲われればすぐに参戦しただろう。彼らが高みの見物を決め込んだのは相手の戦力が不明であることと金にならない戦いだつたからだ。

「さすがは人類の守護者か。で、襲ってきた連中は何者だ？誰に雇われた？」

「そこだよ！」

大男は再び頭を上げた。

「どこの馬鹿が冒険者のトップに喧嘩を売つたんだ？すぐに戦士モモンも出てくるし、組合も黙つてねえぞ」

「だな。街をまるごと敵に回すようなものだ。ということは、暗殺の依頼主はよその土地の誰か？しかし、どんな理由で……」

彼らが話していると外から警笛の音が聞こえた。

「お、本物の衛兵が来たらしいな。これから騒がしくなるぞ」「衛兵に今見たことを話したほうがいいでしようか？」

「俺たちには関係ねーよ。黙つておこうぜ」

「いいえ、私の代わりに話しておいて」

3人とは別の声が言つた。

「…………え？」

窓の外を見ると不可視化を解除した絶世の美貌が現れ、ワーカーたちは石のように固まつた。

「視線を感じたから連中の仲間かと思つたけど、違うようね。私は面倒だから兵士たちに説明をよろしく。いいわね？」

3つの石像は少しして首を縦に振った。

「待ち伏せされたか」

「そのようです」

ナーベラル・ガンマは片膝をつき、頭を垂れて主君の声を聞く。

エ・ランテル最高級の宿でもこの部屋だけはマジックアイテムによつて魔法による監視監聽を防いでいた。壁は分厚く、物理的な監聽是不可能だと店の経営者は断言したが、AINZはそれを信用せず、隠密能力に秀でたモンスター達に宿の各所を監視させている。もしもラビットイヤーのような強化魔法や生まれつきの過剰聴力で彼らの秘め事を聞こうと試みる者がいればその人物は行方不明の運命が待つていた。

「仕方なかつたとはいえ、やはり裏通りなど歩くものではないな。対策をとつておいて正解だつた」

「仰るとおりです」

「……で、襲われる心当たりは？」

AINZはすぐ本題に入った。

「申し訳ございません。私には思い当たる節がありません」

「まつたくか？」

「はい」

「一切ないか？」

「一切ございません」

「……そうか」

部屋に少し沈黙が下りる。

この時、AINZの心中を書き出せばこうだつた。

(ほんとか？何かやらかしたんじゃないのか、ナーベラル？)

ナーベラル・ガンマは人間の感情や機微に疎く、そもそも関心すら持つていない。かつては無礼者や言い寄つてくる男がいたら殴るか、ボコボコにするか、拳で黙らせるか。要するに暴力で解決しようとしました。それにうつかりミスの前科も多い。それらを踏まえるとどこかの偏執的な貴族や金持ちから恨みを買ったのではないか。

そう思う一方で、疑いすぎるのもまざいかとアインズは自分を叱る。

ナーベラルは一人で行動した際の出来事を詳細に報告しているし、全くの逆恨みという可能性もあるのだから。

「アインズ様、これはシャルティア様を精神支配した者に関わりがあるのでしようか？」

ナーベラルは最も警戒していることに触れた。

「絶対に違うとは言い切れないが、それにしては敵が弱すぎる。あの敵なら第3位階以下の魔法など使わないはずだ」

アインズもそれを真っ先に考えたが、解せなかつた。

相手は6人もいたとはいえ個々は少しも強くない。待ち伏せし、気を引いてからの奇襲。雑魚の暗殺団が必死に知恵を絞つて強者を倒そうとした。そんな感じだ。世界級アイテムの持ち主ならもつと有効な奇襲方法があるはずだ。

「それでは一体誰が何の目的で……」

「ナーベラル、私に答えを求めるだけで済むならお前の頭は何のためだ？」

「も、申し訳ありません！」

ナーベラルは絶対支配者のかすかな苛立ちを感じ、床に額をつけんばかりに頭を下げた。

対して、アインズは罪悪感が湧く。

本当は「俺だつてわかんないよ」と言いたかつたが、ナザリックの絶対支配者としてそれは許されない。

おそらくナーベラルは偉大な御方のことだから無数の可能性を想定し、すぐに真実へたどり着くと思っているだろうとアインズは思つてゐる。

んなわきやない。

しかし、部下たちの信じる智謀の王は演じねばならず、同時に犯人も搜さなければならない。

この難題をクリアするため、アインズには2つの作戦があつた。「見当はついているが、今は確証のない段階だ。ナーベラル、私はお前

がどんな風に考えるかを知りたい。ほかの者と相談して良いからこそ
れぞと思うものがあれば言つてみるがいい。それが見当違いの推測
だつたとしても怒る私ではないぞ」

これが第一の作戦。

ナーベラルに推理させ、有望なものがあれば自分も考えていた体で
検証するといういつもどおり浅はかな考えだつた。

「畏まりました！ 浅はかであつた私をお許しください！」

「許そう」

（浅はかなのほどつちだ……）

AINズの罪悪感がさらに増す。

その時、ドアがノックされた。

ナーベラルはいつでも魔法を放てるよう構える。
「誰？」

「夜分に恐れ入ります、ナーベ様！」

宿の従業員の声だつた。

「冒険者組合の方がいらっしゃっています。組合長が至急お二人にお
話があるので組合まで来てほしいと……」

「ああ、襲撃について説明しろということだな。行くぞ」

AINズは椅子から立ち上がつた。

組合へ行くのは第二の作戦のためでもあつた。

人間たちに犯人を見つけてもらうのだ。死体の身元などはこの都
市の警察的機関が調べている最中だろうし、冒険者組合もそのトップ
が狙われた以上は必死に捜査してくれるはず。人間のことは人間が
調べたほうがよいに決まつてゐるし、人海戦術は古典的だが有効な捜
査方法だ。

（本当に他力本願だな。俺自身も必死に考えてみるが……名探偵を召
喚する魔法があればいいのに。真実はいつも一つ、だつけ？）

AINズは大昔に著作権が切れた漫画のキャラクターを思い出し
た。

情報収集

「よく来てくれた、モモン君。ナーベ嬢も」

冒険者組合組合長AINZの顔には憂慮があつた。
となりに座る魔術師組合組合長も同様だ。

(緊急で呼び出されるのはシャルティアの一件以来か……)

AINZは少し前のことを思い出す。

その時は都市長とミスリル級冒険者チームのリーダーたちがいた。
そのうち一人はこの世にいないのだが、彼の名前はもう覚えていない。

「座ってくれ。さつそく確認したいが、彼女が襲撃されたのは事実か
ね？」

「はい」

AINZは話の先がわかつてるので早く進めようとした。

「人違いという可能性はないか？貴族の令嬢か誰かと間違われたとか。
あるいは強盗だとか？」

AINZの声にはすがるような響きがあつた。

「ありません。強盗ではなく、殺害が目的です。敵は待ち伏せしたう
えにはつきりと顔を見てから襲っていますから」

ナーベラルの代わりにAINZは答え続ける。

彼女に答えさせるとうっかり余計なことを喋りそうなので基本的
には喋らなくていいと言つてある。

「なぜ彼女がその場所を通るとわかつたのだろう？」

これはラケシルの問いだ。

「ナーベは以前に頼んでいた冒険用具を店に受け取りに行くところで
した」

AINZは事実をそのまま話す。

冒険者としての活動で細かな消耗品は出る。それをナザリックか
ら補給していたのではもつたいないし、怪しまれるので普通にこの街
で購入していた。その店が人の少ない裏通りにあるのは不満だった
が、表通りより土地が安いとか理由があるのだろうと勝手に想像して

いる。

「そこの店主が関係者が情報を流したと？」

「いいえ、ラケシルさん。隠すようなことではありませんし、店の箱がつくから積極的に話す人もいます」

AINZもその点は考えた。

最高位冒険者ご用達となればどこの店もこそつて宣伝するし、ナーベラルはとにかく噂の的になりやすい。「あの美姫が来たのか。何を買ったんだ?」という具合に話し、次の来店がいつか知るくらい容易だろう。あとで調べるつもりではあるが、黒幕が馬鹿でないならそこに手がかりを残すと思えない。

「店の関係者を調べるよう私から伝えておこう」

AINZは言った。

「では、犯人の目的はなんだ?」

来たぞ、とAINZは思った。

「我々は魔物の討伐で社会にも生態系にも問題がないよう配慮しているが、完璧ではない。君たちに任せた依頼のどれかで恨みを買つてしまつたのだろうか……」

AINZは考え込む。

この芝居にはAINZも苦笑した。

「組合長、はつきりと言つてくれて構いませんよ。公式の依頼で誰かに恨まれるはずがありません。非公式な依頼を受けたと思われているのでしょうか?」

「いや、そういう意味ではない!そもそも非公式な依頼を受けても何も問題はないのだから!」

AINZは取り繕つたが、図星だと丸わかりだ。

これがAINZの恐れていたことだつた。冒険者が暗殺対象になるなど汚い仕事に手を染めて恨みを買ったときしかない。そして、そういう悪い噂ほど急速に広まつてゆく。
(どこの誰か知らないがよくもやつてくれたな……)

手間と時間をかけて築いた最高位冒険者の地位と名声を台無しにされかねず、AINZは事件の首謀者に黒い感情を募らせる。

「断言します。非公式な依頼は一つも受けていません」

「では、犯人の目的はなんだと思う？これを聞いてよいかわからないが、君たちの国家でトラブルが起きたとどう可能性は？」

「それはありません。そちらも断言できます」

AINZは即答した。

そもそもそんなものは存在しないのだから考へるだけ時間の無駄だ。

「では、目的はなんだろう？」

(こつちが知りたいくらいだよ！)

AINZはそう言いたかつた。

いくら考へても偽装身分であるモモンとナーベが恨まれる覚えなど全くなき。荒唐無稽な逆恨みでもされたか、AINNZのいうとおりドジな暗殺者たちが標的を間違えたのではと思いたいくらいだつた。それはそれで容赦しないが。

「以前に……」

綺麗な声が響いた。

AINZは隣を見る。

ナーベラルがおずおずと何か言おうとしているのだ。

「以前に……ナントカという秘密結社の男を墓地で殺しましたが、その報復という可能性はないでしょうか？」

ほう、とAINZは思った。

基本的に喋らなくていいと言つたが、ここに来る前に彼女の考へを聞かせると命じた。ナーベラルなりに推理しているのだろう。

「ズーラーノーンか……」

AINNZはそれを聞いて腕を組んだ。

だが、すぐに首を横に振る。

「いや、それはないと思う。彼らは復讐を考えるような集団ではないし、それなら冒險者組合を恨むのが筋というものだ」

「だろうな」

「私も同感です」

AINZにまで否定され、ナーベラルは少し落ち込んだ。

「だが、発想は悪くないぞ、ナーベ。柔軟な考え方だ」

AINZは嬉しそうに言つた。

的外れだとしても部下が必死に考えたのだからここで褒めないでどうする。

それを聞いてナーベラルも元気を取り戻す。

「ナーベ嬢、君の所持品の何かを狙われたという可能性は？」

そう聞いたのはラケシルだ。

「どうと？」

AINZはラケシルの意図を計りかねた。

「以前に第8位階の魔法が封じられた魔封じの水晶を見せてくれたが、あれも命がけで奪つてゆく者がいないとは限らないほどの代物だ。普通なら戦闘のプロから奪うなどありえないが、その危険を冒してでも奪いたい別の品物があつたりしないだろうか？」

「それはないでしよう……」

ナーベラルの代わりにAINZが答えた。

「誰かにナーベの所持品を知る機会があると思えませんし、そもそもそれほど貴重なものは心当たりがありません」

「…………」

ラケシルの顔に「残念」という感情があるのをAINZは見逃さない。

（こいつ、貴重なマジックアイテムを見たいだけでは……。邪推し過ぎか？）

AINZはその可能性は低くないと思つた。

魔力系魔法詠唱者は知識欲が強いほど魔法を習得できるので必然的に高ランクの魔術師ほど魔法マニアが多い。以前の魔封じの水晶への反応を見るとまつたくの邪推ではないだろう。

「こちらからも質問をいいですか？犯人の所持品などに手がかりは？」

AINZは少しだけ期待をして質問した。

死体をナザリックに持つていかなかつたのは人間たちに捜査させるためだ。

「そうだったー・これを見てくれ」

AINZは小さな袋を取り出すと中から黒い指輪を出した。

奇怪な模様が彫られ、一言でいえば不気味な指輪だ。

「襲撃者は全員これと同じ指輪を持っていたそうだ。一つ借りてき
た」

「魔法はかかっていないと我々が確認済みだ」

LAKEが補足した。

AINZはそれを受け取るいろんな角度から眺める。

「魔法がかかっていないなら奴らの認識証みたいなものでしようか?」
「かもしれないな」

AINZは言つた。

NARVELLがAINZの顔をちらりと見る。

(わかってる。ロケートオブジェクトだろう?)

AINZもすぐに考えた。

もしも襲撃者の仲間が同じ指輪を所持していれば物品探知の魔法
で探せる。AINZは頭の中の予定表にそれを組み込んだ。

「この指輪をお借りしてもよいですか?」

「本来ならまずいが……君なら構わないよ」

AINZは小さな恩を売る。

「他に身元を知る手がかりはなかつた。小額の金銭と武器だけだ。泊
まつた宿を洗い出すために人相書きを配つていて、こちらは時間が
かかる。何しろ大きな街だ」

あまり当てにしない方がいいな、とAINZは思った。

変装していたかもしれないし、正規の宿に泊まつたとは限らない。
壁外で野宿することも不可能ではない。

「とにかく前代未聞の事件だ。目的が何にせよ、組合の威信にかけて
首謀者を見つけ出す」

「魔術師組合も同じだ。魔術師の情報網は広く細かい。期待してく
れ」

二人の組合長は本心か虚勢かそう言つた。

「ありがとうございます」

AINZはとりあえず頭を下げておく。

「では、一つお願ひがあります。兵士や冒険者達にナーベに近づかないよう言つてもらえますか？私たちが泊まつている宿にも近づくなと」

「なぜだ？護衛をつけるつもりだつたが……まさか……」「囮にする気か？」

二人は信じられないという顔をした。

「ええ」

AINZにはそれくらいしか方法が思いつかなかつた。
暗殺者に仲間がいるなら再びナーベラルを襲わせ、そこを捕縛する。敵が自決するというなら動きを封じればよい。あらゆる状態異常系の魔法に並の人間が対策を取れるとは思えないし、仮にそうだとしても毒薬を使わせない手段はある。

「君たちは少しも恐れていないようだな。まあ、6人を返り討ちにしているのだから今さらだが」

呆れとも感嘆ともいえる表情をするAINZ。

「普段なら魔術師を一人で囮にするなど断固反対だが……」

ラケシルのほうはやや呆れが強かつた。

「君たちは規格外だ。余計な心配なんだろくな」

「当然です。我々は最高位冒険者ですから。逃げも隠れもしません。黒幕が何者だろうと必ず見つけ出し、『我々』を襲つたことに責任を取つてもらいます」

AINZは潔白が伝わるよう堂々と言い、必ず見つけ出すぞと自身にも誓つた。

「逃げも隠れもしない、か。最悪の事態は避けられそうだな」

話し合いと情報共有を終え、モモンとナーベが退出するとAINZは言った。

「ええ、二人が街から出て行くと言い出さないでほつとしたでしよう？」

「全くだよ」

AINZOUKは大きく息を吐いた。

この都市は物騒なのでほかの街に移ると一人が言わなかいか、彼は気が気ではなかつた。

「彼らを失うわけにいかない。カツツエ平原を前にしてるというのに、ここにはオリハルコン級の冒険者さえいないのでから……」

彼は以前から不満に思い続けていたことを言つた。

冒険者に国境はなく全ての人類を守る建前があるが、現実にはどこに強い戦力を配置するかという問題がある。他所の冒険者に救援要請しても間に合わないことが多々あるためだ。

実際、ズーラーノーンによるアンデッド大量発生事件があつた時はモモンとナーベがいなければエ・ランテルは良くて半壊、悪ければ全滅しだろう。彼ら最高位冒険者がいることで都市の安全と評判は明らかに増した。経済的な恩恵も受けており、王都での会計報告が楽しみだと都市長は言つた。

「そいいえばオリハルコン級冒険者を引き抜こうとした時があつたな」

「それは言わないでくれ、ラケシル。昔の話だ」

実際には少しも昔ではないが、彼は苦笑した。

他の都市からオリハルコン級冒険者チームを招聘しようと画策し、むこうの組合長と市長から抗議を受けたことがあつた。

「いつそアダマンタイト級を、と考えたこともあつたよ。今では嘘から出た真というやつだ」

アダマンタイト級冒険者という最高戦力が王都には2チームいる。両方が王都に住んでいることは仕方ないという声もあるが、1チームを他所へ配置すべきではという声もあり、AINZOUKも後者だつた。それが今では自分たちも王都と同様に嫉妬される側なのだから世界は面白くできていると彼は思つた。

「おつと、話を戻そう。非公式の依頼を受けていないというモモン君の言葉は信じていいと思う。手を出す理由がない。では、暗殺者の目的は何だと思う、ラケシル？」

「彼らの前でも言つたが、本当にお手上げだ」

ラケシルは素直に言つた。

「黒幕が狂人だつたら最も納得いくよ。それよりもう一つの問題に移らう」

ここでラケシルは声を小さくした。

「組合に犯人の協力者がいるかどうか、だ」「ああ、それか……」

彼は苦々しい顔になつた。

二人ともモモンとナーベの前で言わないことがあつた。冒険者組合や魔術師組合に暗殺計画の協力者すなわち裏切り者がいる可能性だ。

美姫ナーベは有名とはいえ、部外者が一から情報を集めるのは苦労が多い。市民なら情報を集めやすいし、組合員ならさらに容易だろう。裏切り者がいたらこここの組合の評判が地に落ちることになり、あつてはならないことだが、ありえないと信じるほどアンザックとラケシルは無垢でも馬鹿でもなかつた。

「信用できる者を集めて調査する。魔術師組合もそちらで頼むよ」

「ああ。協力者はできれば無関係の市民、最悪でも組合を抜けた人間であつてほしいね。現役の組合員が裏切り者だつたらあの二人がなんと思うやら」

「全ての冒険者がモモン君のようでいてくれたらいいのだが。彼は過剰なくらいに法律を気にするからな」

「まつたくだ」

ラケシルも心から同意した。

会議室を出たアインズは下の階へ降りるとアインザックから聞いた部屋に向かつた。

ドアをノックすると「はい」という女性の声がした。

「冒険者のモモンだ。少し話をしたいのだが」

彼がそう言うと部屋の中でバタバタと慌しい音が鳴り、すぐにドアが開いた。

「モ、モモン様！よくぞいらっしゃいました！ナーベ様もご機嫌麗

しゅう！」

一人の受付嬢が驚いた顔でアインズを見上げる。

部屋は魔法の照明が輝き、大きな机の上にはペンとインク、そしていくつも巻物が広げられていた。

「急に訪ねてすまない。こんな遅くまで仕事とは『苦労なことだ』

「仕方ありません。昼は通常業務がありますから」

従業員は慌てた顔を営業スマイルに変える。

「ということは、そこにある巻物は私たちが頼んだアレか？」

「はい」

「おお、それは益々すまない」

「とんでもございません！お二人がこんな雑用をなさる必要はありませんから！」

「ん？ああ、そういうえばお前には言つてなかつたな……」

アインズはこれを機に彼女に説明しておくことにした。

「最高位冒険者になつてからあちこちから手紙が届くようになつたのは知つてるな？討伐完了への礼状や昇格祝い、その他些細なものだ」「はい」

「ファンレターも来ますよ。お二人なら当然のことですが」

受付嬢が言つた。

「私はその手紙を仕分け、儀礼的な返事が必要なものは代筆しています。あつ、申し送れました！私はイシュペンと申します。以後お見知りおきを。ナーベ様」

彼女はナーベラルに向かつて微笑み、返ってきたのは微動だにしない氷の表情だつた。

「秘書、ということですか？」

ナーベラルもおおよそ理解したようだ。

「そうだ。秘書を用意すると組合長から言われたときは驚いたが、とても助かつていて。ありがとう」

「とんでもございません、モモン様！」

アインズが頭を下げ、イシュペンは慌てた。

(俺たちに貴族や商家から来るスカウトの手紙を読ませたくないって事情も知ってるんだがな)

AINZは兜の中で笑う。

冒険者を辞めて私兵として雇用されないかという直接あるいは遠まわしな表現が書かれた手紙が何通も来ており、送り主は王国だけではなく帝国の人間も含まれる。さすがに組合もそれらを隠すことはないが、遠まわしな表現は『意訳』して伝えていることをシャドウデーモンを通じてAINZは知つた。

卑劣とは思わなかつた。有能な社員を繋ぎ止めたいのは企業なら当たり前であるし、どこの貴族や富豪であれ今の偽装身分を捨てるほど有益な待遇があると思えない。

「さて、ここに来た用件だが、ナーベ宛に変な手紙は届いてないか？危害を加えるとか、それに近い脅迫状が来たということは？」

「ありえません！」

イシュペンは即答した。

「そんな手紙があればすぐにご報告しています！」

「そうか……まあ、そうだな」

AINZは自分なりに思いついた可能性が潰れ、落胆した。

ナーベラルに恨みを持つ人間がいるならその兆候がどこかに現れると思ったのだが、所詮は素人の思いつき。名探偵AINZなど夢のまた夢である。

「あつ、変な手紙はないのですが……一つ困っていることがあります」「なんだ？」

事件の手がかりか、とAINZは少し期待する。

「以前にご報告したエフエンドラ様のことです。お断りの手紙を出し続けているのですが、なかなかあきらめて貰えず……」

AINZは記憶をひっくり返してエフエンドラという名前を探す。人名を覚えるのはビジネスマンの基本だが、この世界の権力者は3つも4つも名前を持つので苦労している。

「ああっ！ブルムラシューの息子……じゃなくて、ブルムラシュー侯のご嫡男か。ナーベに手紙を送つてくるという

「はい」

イシュペンが頷き、一人だけ意味がわからないナーベラルは首をかしげた。

「ブルムラシュー侯爵はわかるか？6大貴族の一人で王国随一の財力を持つている人物だ。確かに裏で帝国に情報を流してゐる噂が……いやいやいや！そういう理不尽な噂も出るくらい有名な貴族という意味だ！ゴホンッ！公爵の嫡男がお前によく手紙を送つてくるのだ。理由はまあ、なんというか……」

「ナーベ様と交際をしたいという手紙です」

イシュペンがAINZの代わりに答えた。

「は？」

顔に虫が止まつたような不快な顔をするナーベラル。

「結婚を前提に、と。どこかでナーベ様のお顔をご覧になつたようで、何度も情熱的なお手紙を送つてくるのです。私から丁重にお断りする手紙を書いて出しているのですが、忍耐の強い御方のようだ……」

イシュペンは苦笑する。

しつこい奴がいたものだ、AINZは思つた。

実はAINZも同じ話が舞い込むことがあつた。雇用だけの関係ではなく養子や婿入りという血の繋がりで大きな戦力を取り入れようとする商家や貴族だ。血統を重んじる貴族とはいえ財産や武勲、あるいは能力があるなら体裁を整えて家に迎えることがあり、最高位冒険者は申し分ない武勲の持ち主だつた。

AINZは度々断りの手紙を送らせ、相手も2、3回断ればあきらめてくれる。それが常だつた。しかし、戦士モモンと比較して魔術師ナーベに結婚まで迫る貴族は意外に少なく、大貴族がここまで執着するのも意外だつた。

「エフエンドラ殿はどうしてそこまでナーベにこ執心なのだ？この国で魔術師の地位は低いと聞いているが……」

「決して褒めるわけではありませんが、ひょっとするとエフエンドラ様かお父上の侯爵様は魔術師の重要性を理解しているのかもしけません」

イシュペンは冒険者組合受付嬢の血が騒いだのか突然きりつとした。

「貴族ならば間違いない手紙の指導係がいるでしょうが、ナーベ様へのお手紙はそのお美しさを讃えるものが多い中で、この御方はそこには軽く触れるだけで魔術師としての実力を褒め称えています。

百万の兵を抱えても不可視化や瞬間移動などの魔法を使われれば対処できません。魔術師に対抗できるのは同じ魔術師だけです。帝国のフルーダ・パラダイン様が良い例かと。あの御方がいることで帝国は王国が危惧するような多くの陰謀と無縁でいらっしゃいます。

そもそもお二人が討伐した数々のモンスターと功績を検証すればモモン様だけでなくナーベ様も尋常ならざる能力の持ち主である事は誰にでも理解できること。戦士と魔術師の二人組で活動するなど通常は不可能ですから。そういえば6大貴族のレエヴン侯爵様もお二人が最高位冒険者に昇格されてすぐに祝い状を送られており、この御方もかなりの知恵者かと存じます。

ですが、ナーベ様を正しく評価なさっている貴族は残念ながら王国よりもむしろ帝国に多く――

「わかった！わかったからその辺にしてくれ！」

AINZはこのまま永遠に喋り続けそうな彼女を制止した。

「とにかくエフエンドラ殿は熱烈にアピールしてくるわけだな？」

「はい……。ひょっとしたら私が身分違いを強調してお断りしたしたことでエフエンドラ様は脈ありと判断したのかもしれません。或許しください！」

イシュペンは深く頭を下げる。

「いや、文面も考えずにただ断つてくれと頼んだのは私だ」
AINZは少し責任を感じる。

(暗殺者の問題に比べれば本当にどうでもいいことだが、財力のある貴族なら友好的な関係でいたい。角が立たないよう治めるにはどうしたらいいんだ……?)

AINZは新しい問題ができる頭が痛くなつた。
「死ね、ウジムシ、と返事を出せばあきらめるのでは？」

ナーベラルは不思議そうに言つた。

部屋に沈黙が降りる。

「……ま、まあ、今度は少し強めの表現で断つてもらえるか？無礼にならない範囲で」

AINZは文面をどうすべきかわからないのでISHUPENに丸投げした。

「か、畏まりました……」

「もーもなく彼女は応じる。

（よし、何かあればこいつのせいにできる！）

浅はかな考えを抱きながらAINZは退出した。

部屋を出るとナーベラルが再び口を開いた。

「ア……モモンさん。先ほどの貴族がこの一件と関わっている可能性はないでしょうか？」

（え？ どんな関係が？）

AINZには想像ができなかつた。

「いえ、どのようにかはわかりませんが、同じ時期に起きたからには偶然でない気がするのです」

「……ほう」

ナーベラルは必死に考えているようだ。

いや、ないだろ、とAINZは言いかけた。

しかし、ここで明言すると万が一の際に言い訳できなくなる。

どう答えるべきか。

「……まあ、柔軟にいろんな可能性を考えてみろ。ただし、考えすぎると泥沼にはまるぞ」

一見、意味がありそうで何の意味もないことを言つて歩き出す。

ナーベラルはそれ以上質問せず、AINZはほつとした。

幻の胃がきりきりと痛む。

（とりあえずあの指輪を探知させよう。だが、それで仲間がわかるなんて都合のいい展開があるか？俺が襲撃者ならそんな手がかりは残さないぞ……）

AINZはそんな疑問を持つた。

策略V S策略

「支配人——!!」

従業員はドアを殴るようにノックし、呼び立てられた彼は気を悪くした。

机の上に金貨と銀貨を並べ、売り上げを集計している最中だつた。高級娼館「紫の秘薬館」の経営者兼支配人の男はこの間に邪魔されるのを最も嫌う。

「どうした?」

ドアを開けもせず彼は尋ねる。

醉漢が暴れているか、あるいは衛兵の抜き打ち調査か。

娼館の従業員が血相を変える時はその2つと相場が決まつてゐる。

「い、い、い、いらっしゃいました!」

「誰がだ?」

やはり衛兵か。調べられる前に時間を稼がねば、と彼は思う。

「ナ、ナーベ様です! 最高位冒険者! 漆黒のモモン殿の相棒ナーベ様です!」

彼がその言葉を理解するのに3秒ほどかかった。

ジヤラララ、と金銀の硬貨が床に落ちる。

「なんだと!」

ドアが勢いよく開き、従業員の顔を打つた。

「ぐあつ!」

「ばれたか? ばれたのか?」

悶絶する男に彼は小声で問い合わせる。

すべての終わりがやつて來たと思つたのだ。

先週、今週と売り上げの最高記録を更新し、ライバル店に差をつけたという達成感が吹き飛んでいた。

「ち、違います……! 部屋を貸し出していたのがばれたらしく、そこを調べたいと仰つてます!」

「部屋だと?」

支配人はすぐに何のことか思い出した。

都市内では正規の宿以外は異邦人を宿泊させる商売をしてはならない。宿の質を維持する目的もあるが、よその厄介者や犯罪者を住み着かせないためだ。この娼館は正規の宿ではないが、金さえ払えば1日か2日程度の宿泊を許し、昨日も一人の男を泊まらせていた。

「あいつが。じゃあ、あればばれてないのか？」

「そ、そうみたいです……」

経営者は安堵した。

（あの客がなにかやつたのか？仮眠を取らせていたつて建前だが、通じないよな……）

法律上ぎりぎりの言い訳を作つておいた彼だが、相手が相手なので大人しく要求を飲んだほうがいいと即座に判断する。

従業員を連れて1階へ降りると黒い瞳が彼を射抜くように見た。噂どおりの天上の美貌。そして不似合いな魔術師の格好。

彼女から離れた位置に何人かの娼婦たちがおり、怯えた目で彼を見ている。

（わかつてる！お前らは何もしやべるな！）

支配人は目でそう言い、突然の訪問者に愛想よく話しかけた。

「これは、これは。当店の部屋を確認なさいたいとのことですが？」

支配人は精一杯の努力で笑顔を作つた。

ここは荒くれ者や貧乏人が来られる場所ではないが、身の程知らずの客は珍しくない。対応するのは慣れているが、今日ばかりは肝が冷えた。

「一番奥の部屋よ。言っている意味はわかるでしょ？見せなさい」

美姫は高々に命令した。

やはり違法なことをしていると承知しているらしく、支配人は全面降伏を決めた。数日の営業停止処分をくらうだろうが、それくらいは許容範囲だ。

「承知致しました。我々も美姫ナーベ様を謀るほど愚かではございません。こちらです……」

支配人は彼女を伴つて謎の男の借り部屋へ歩く。

「昨日、部屋を貸してくれと頼まれました。今は留守です。というか、

『決して中を消して覗くな。掃除も不要だ』と言つて一度出かけたきり戻らないのです

「どんな客だつたの？」

「髭を生やした中年の男です。服装はよくある旅人という感じでした」

「名前は？」

「名乗りませんでした」

「つ……」

ナーベラルの舌打ちが小さく響く。

部屋の前に立つとついてきた従業員が鍵束を取り出し、その一つで扉を開けた。

中には闇が詰まっていた。

「おい、明かりを持つて……」

彼がそう言い終える前にナーベラルは躊躇なく闇の中へ入つていった。

残つた支配人たちは怪訝な顔を見合わせる。

1秒、2秒、3秒。

4秒後に闇から紅蓮の炎が吹き出した。

「うわあああ！」

「熱うううう！み、水だ！水を持つてこい！」

支配人の命令も従業員たちの反応も早かつた。

店舗が密集する都市において失火は重罪。こういう事態に備えて水を張つた甕や桶を置いている建物は多く、この館にもある。

しかし、従業員たちがそれらを持つてくる前に部屋の炎は奇術のごとく消え失せた。

煙がくすぶる闇から出てきたのは煤一つない美姫だつた。

黄金と宝石でできたものにしか触れたことがないと思わせるほど美しい指は不気味な黒い指輪をつまんでいる。

「だ、大丈夫ですか、ナーベ様？」

「何が？」

「何がつて……」

聞き返されて支配人はどう答えたものかわからなかつた。

「じゃあ、最後に確かめるわね」

何を、と彼が聞き返すことはできなかつた。

『人間種魅了』チャーミングパーソン

ナーベラル・ gamma; は魅了をかけて支配人を尋問する。

本来なら一般市民に魔法をかけてはならないと命じられているが、今日は後ろ暗い事をしている連中なので衛兵に訴えることはないだろうと至高の御方から許可が出ている（都市の宿泊営業法について彼女はあまり理解していないが）。

わざとらしい愛想笑いをする毛虫のような男たちと白い蛾のような女たちの住む小屋。こんな不愉快な所は用がなければ立ち入りたくもなかつた。

ここに来た理由はロケートオブジェクトによつて指輪を発見したからだ。

「この部屋を借りた男について何か隠してない？ 実はあなたが殺し屋の一昧だとか？」

それならここにいる人間たちは全員ナザリックの拷問室送りだ。

ナーベラルはそうなることを期待した。

「……いいえ、お答えしたことしか知りません」

相手は目をとろんとさせて答えた。

残念だと感じながら彼女は立ち去ろうとする。

もはやこんな不快な場所に一秒もいたくない。

彼女が歩くと何事かと集まつていた娼婦たちは「ひつ」と声を上げ、道を開ける。

その怯えに少しだけナーベラルは気分がよくなる。

人間から羨望や嫉妬を浴びことが多いが、この反応こそお似合いだ。

しかし、廊下をしばらく進んだ時、彼女は歩みを止めた。

（この蟻たち……どうして私から目を反らすの？）

ここまで怯えさせる理由に心当たりがないことに彼女はやつと気づいた。まるで後ろめたい事でもあるかのようだと。

「そこのあるな」

彼女は支配人を呼んだ。

「……はい、なんでしょうか？」

「なぜ彼女たちは私から目を反らすの？隠していることがあつたら全て話しなさい」

その言葉で娼婦たちの顔に死相が出た。

「……はい。仕事で”幻惑の粉”を使っていることを貴女に知られたらまずいかからです」

支配人はすらすらと話し始めた。

「幻惑の粉？」

幻影を作つて姿を偽る魔法をこめたマジックアイテム。

それはナーベラルも知つてゐる。

「……はい。犯罪に使われる危険があるので作製と所持が規制されています。これを使ってお客様の望む姿に偽ることで彼女たちは倍の料金を貰っています」

娼婦たちの体が震え始めた。

対してナーベラルは困惑したままだ。

（犯罪だから隠した？でも、なぜ私にばれたら困るの……？）

彼女の中で疑問が渦を巻く。

その渦はぐるぐると動き、泥のような困惑に理解の光が差し込んだ。

「あなたたち……」

水結地獄の底から響くような声がして周囲の娼婦たちは数歩下がつた。

「まさかと思うけど……私の姿は使つてないわよね？」

沈黙がその場所を支配した。

「使つてないわよね？」

もう一度言われて女たちは目配せしあう。

そうだとと言え。

誰でもいいから言え。
生き残るために。

それができないのは魅了を使われるとわかっているからだ。

「……あなた、どうなの？」

氷の声が魅了状態の男に向けられた。

「……はい。よく使います。貴女は需要が一番高いですから」

娼婦たちは心の底から支配人を殺したいと思つた。

「ち、違うんです！」

「私たちはやりたくなかったわ！」

「支配人に命令されて仕方なかつたんです！」

彼女たちは生き延びるために必死に自己弁護する。

実際は給与が上がつて喜んだし、富も名声も何もかも所有している贅沢な女をこつそり利用してやることに喜悦を感じることもあつたが、それは拷問されても言わないだろう。

「もういい……喋るな……」

ナーベラルの両の手と床の間に白い稻妻が走つた。

空気がパチパチと弾け、突風が吹き荒れる。

「ひいいいいい！」

「ごめんなさい！」

「許してください！もうしませんから！」

いくつもの悲鳴が風に乗つた。

対してナーベラル・ガンマもまた必死に理性と憎悪が戦つていた。このまま激情にかられ、第8位階の魔法で建物ごと消滅させることができるのは彼女もわかる。それでも憎悪に援軍が加わり続け、理性の敗色が濃くなつた。

このまま激情にかられて皆殺し。

ナーベラルのミスに新たな項目が加わる。

そうなる直前、がしやりと鎧の音が響いた。

「やめろ、ナーベ」

重厚な声は決して大きくなかったが、悲鳴と雷鳴を塗り潰した。誰の到着であるか皆が理解した。

ナーベラルも即座に魔法を解除する。

「……畏まり……ました」

血を吐くような懊惱が混ざった声だった。

「どれだけ不愉快かつ理不尽であろうと法は法だ。それはお前たちにもいえる」

黒き鎧の偉丈夫はあたかも一城の支配者ロード・オブ・ア・キャッスルが臣下を戒めるように言った。

「それを破るなら相応の覚悟をしろ。お前たちが違法な商品を使つたことと一人の魔術師の名譽を傷つけたことは報告しておく」

彼はそれだけ言うとナーベラルを連れて退出した。

間違いなく殺されたと思っていた女たちはその場にへたり込み、立っているのは魅了効果が継続中の支配人だけだった。

紫の秘薬館からは一瞬炎が上がり、少し間をおいて白い稻光が現れた。

歓楽街でそんなことが起きれば周囲に人だかりができるのは当然だ。

その館から誰もが知る最高位冒険者チームが出てくると驚きの声が上がり、群衆の中から一人の男がその場を離れた。

彼はしばらく歩くと脇道に入り、誰もいないことを確認すると伝言の魔法を使つた。

「こちら赤の一番。犬は罠から抜けました」

「そうか」

彼だけに聞こえる声はやはりなと付け加え、それが彼を驚かせた。「予想されていたのですか？」

「相手は人類最強の一角だぞ。こちらが指輪の探知を予想するようには、むこうは罠を張つていると予想する。すでに6人死んだ。俺やお前も死ぬかもしれない。それ自体は構わんが任務は果たせないのは困る」

魔法で会話する相手もまた首領に忠誠を誓つていた。
彼らは全員そうだった。

「恐ろしい敵ですね」

赤の一番は生涯で最大の仕事になると確信した。

モモンとナーベの功績はとてもないものばかりだ。その一つであるズーラーノーンの討伐では誘拐された市民の救助があまりに早く、ナーベがなんらかの探知魔法を使えると首領は予想した。最初の襲撃班に指輪を持たせたのはそれを見越したうえでの二次作戦だった。

彼は部屋に罠を仕掛け、能力の全てを注いで隠蔽したつもりだったがナーベには見破られてしまつたらしい。

「お前は待機だ。指示以外の行動をとつた場合は裏切つたとみなす。いいな？」

「はい」

男は魔法を終了するとセーフハウスに戻ろうとする。

その時だった。

頸に焼けた鉄を突き刺されたような痛み。

ドミネイトパーソン
ぎやあ、と彼は叫ぼうとするが声は出なかつた。

『人間種支配』

激痛に包まれながらも彼は静寂と支配の魔法をかけられたことを理解する。一瞬の呪文抵抗さえ許されない速度だつた。

「ようやく一人生け捕りにできた」

不可視の敵は嬉しそうに言つた。

「これが歯に仕込んだ毒薬か。ほほう」

空中に浮いているのは彼の下あごだつた。

とてつもない力で筆り取られたのだ。

「罠を張つて首尾を見届けるのはいいが、ナーベラルが出てきた瞬間に立ち去つたのがまずかつたな。空から見ていてお前だけ動きが不自然だつた」

（誰だ……こんな奴が仲間にいたのか……）

彼は後悔するも手遅れだつた。

モモンとナーベ。その二人に視線を気取られないようにしたが、別働隊、それも超一級の魔術師がいたことは想定外だつた。誘導したつもりが逆に利用されてしまつたのだ。

「さて、お前はナーベを襲つた連中の一味だな？」

その質問に彼は答えられない。

「あつ、怪我を治さないと喋れないよな。静寂も解かないと」

不可視の相手は持っていた下あごを粉碎すると何かを彼に振り掛ける。

激痛が消えたことで治癒ボーションだと理解した。

「さあ、お前はナーベを襲つた連中の仲間だろう?」

「はい」

彼の口は意志と無関係に動いた。

「よしよし。で、お前たちはなぜナーベを狙う?」

「知りません。任務の理由は常に伏せられています」

「リーダーは誰だ?」

「首領です」

「首領の名前は?どんなやつだ?」

「名前はなく、私たちは首領としか呼びません。顔や素性も一切知りません」

「なぜそんな奴の下で働く?お前はどういう人間なんだ?」

相手は困惑しているようだ。

「私たちは元奴隸階級であり首領に救出されて暗殺者として育てられました。あの御方に絶対服従を誓っています。教育と訓練を受けた後は地方の町にスリーパーとして潜み、伝言の魔法によって命令が届いた場合のみ集結して暗殺活動を行います」

「今回の作戦における仲間の人数と居場所は?」

「知りません。捕まつた場合に備えて私たちは互いに必要最低限の情報しか与えられません。首領だけが全ての情報を持っており、作戦直前になつて魔法で指示を出します」

「厄介だな……」

不可視の敵はそう言い、赤の二番も自分が捨て駒であることにほつとした。

情報を探して首領に迷惑をかけずにすむ。

「じゃあ、お前が仲間や首領をおびき出すことはできないのか?不測の事態が生じたとか言つて」

「不可能です。命令以外の行動をとれば敵に魔法で操作されたと見なされます。首領はその可能性を最も警戒していますから」

「仮にだが、お前を泳がせておけば首領はいつか接触してくると思うか？」

「いいえ、首領は決して姿を見せないでしよう。ナーベ暗殺が成功しても我々はスリーパーに戻るだけです」

「……はあ」

ため息がもれた。

「じゃあ、お前はいらないな」

《心臓掌握》

赤の一番という暗殺者は絶命し、地面に崩れ落ちた。

「魅了や支配への対策が徹底してるな。ひよつとして実働部隊は全員こういう捨て駒か？自決は情報の秘匿というより拷問回避だな」

AINZはそう言うと再びため息をついた。

ロケットオブジェクトで指輪を見つけた時に魔法の罠も見つけ、「逆に利用してやるか」と待ち伏せを待ち伏せするという作戦に出たが、敵が情報を持たないという不安が的中した。

「……どうしよう」

極めて弱気な声だった。

「首領というやつを探すしかないよな。どうやつて？伝言の魔法でしか接触してこないとなると……街中にシャドウデーモンをたくさん放つて……でも、街の外だつたら？クソ、顔がわかればどうにでもなるのに……」

ぶつぶつと自問自答した彼はしばらくすると死体と共に転移した。

事実誤認

襲撃と娼館のぼや騒ぎ、そして誰も知らぬ殺人が起きた翌日。日は再び山脈の彼方へ沈みかけていた。

ナーベラル・ガンマは焦っていた。

至高の御方は巡回捜査という名目で街中を歩くよう命じ、彼女は朝からエ・ランテル中を歩き回つて襲撃を待つた。彼女からすればゴミ同然の商品を扱う店や酒場にも入り、挙句の果てにソリュシヤンから「無防備な状態になれば襲つてくるかも」という暗殺者なりのアドバイスを受けてこの街の公衆浴場さえ利用した。

成果はゼロ。

無駄骨だった。

巡回捜査を命じられたからにはその役をこなす事こそ務めと思つていたが、昼を過ぎた頃から自分は思い違いをしてるのではと考え始めた。

(このまま歩き回るだけでいいの? アインズ様は独自に捜査することがあると仰つていた。すでに犯人の目星がついておられるのだわ……。私がアインズ様のお考えに追いつき、何か提言するのを待つておられるのでは?)

ナーベラルはそんな焦りと不安から必死に考えていた。

自分と交際したいとほざく貴族うんぬんの話はやはり関係がないと今では思つてゐる。となると、自分がらみで起きた他の出来事といえば娼館のあれくらいだ。(館の連中を皆殺しにしたい欲求を抑えつつ)あの一件が自分の暗殺と結びつくかを彼女は考えたが、これも見当がつかなかつた。

(あの2つは無関係で他に目を向けるべき?でも、何を手がかりに……)

彼女に焦りと困惑が募つてゆく最中、後ろから誰か近づいてくる足音がした。

やつと釣れたか。

彼女はそう思つて迎撃の準備をする。

今度こそ自決させないし、逃亡も許さない。

足音は彼女のすぐ後ろまでやつってきた。

「あの、ナー……うあああああ！・待つてください！」

魔法のターゲッティングをされて小柄の男は慌てた。

「誰？何の用？」

ナーベラルは攻撃態勢のまま聞いた。

先制攻撃をぎりぎりで踏みとどまつたのは午前中に身の程知らずの旅行者が話しかけて来たのを勘違いして騒ぎになつたためだ。

「僕です！シユラです！昨日、衛兵に状況を話せと貴女に言われた！覚えてないんですか？」

「……ああ、あのワーカーね。で？」

彼女は相手の正体がわかつたが、友好的になるはずもない。

「お伝えしたいことがあります。お役に立てばいいんですけど……」

彼はきよろきよろ周囲を見てから小声になつた。

「襲撃者に魔術師が一人いましたよね？今日になつて思い出したんですけど、彼と似た人を以前に見た気がするんです」「……どこで？」

突然やつてきた手がかりに彼女は一瞬「都合が良すぎる」と思つたが、この3人が無関係であることは昨日の会話から確定している。聞く価値はあると考えた。

「あの、似てるだけで断言できませんよ？相手が相手なので間違つたらまずいんです。あくまで似てる気がするってレベルの話で……」「早く言いなさい、アメンボ。殺すわよ」

ナーベラルは早くも忍耐の限界を迎えた。

「は、はい！間違つてたら本当に申し訳ないんですが、ヒムナル様の屋敷で見たんです」

「誰？」

彼女がまったく知らない名前だつた。

「え？知らないんですか？ここの大隊を指揮してるヒムナル様ですよ」

彼の話を要約するところだつた。

一週間ほど前に大隊長の屋敷を通りかかった彼は魔術師の格好をした男がそこから出てくるのを目撃し、この町では見慣れない同業者だつたので不思議に思っていた。その男の顔が襲撃者の魔術師と似ているというのだ。

（兵の指揮官？偽装した二人はそいつから鎧を提供された？可能性はあるわね……）

ナーベラルは相手の話したことを咀嚼する。

この人間の言うことが事実ならヒムナルとやらが敵の仲間であり、捕まえて情報を引き出せばよい。

「そいつの屋敷はどこ？」

「まさか……行く気ですか？」

「どうでもいいでしよう。早く教えなさい。強制的に聞き出してもいいのよ？」

彼女は半ば脅迫して屋敷の場所を聞きだし、そちらの方向へ歩き出す。

「お気をつけて……」

シユラという魔術師の言葉はナーベラルの背中に当たつてかき消えた。

大隊の指揮官ともなれば現場上がりの兵卒では届かない地位である。

大隊長ヒムナルの屋敷は高級住宅街にふさわしい豪勢なものだつた。軍人はその給与を全て貯蓄してしまう者もいるが、庭の彫像などを見るとヒムナルという男は勤儉尚武というわけではないらしい。

ナーベラルがシャドウデーモンを先行させたところ、ヒムナルらしき男は在宅中であり、他には家族と使用人たち、そして警備兵が二名いた。不審な武装集団をかくまつていれば話は早いが、そんな様子はない。

「……なるほど。で、どうするつもりだ？」

魔法越しにアインズは聞いた。

ナーベラルは自分なりに考えた作戦を勇気を出して口にする。

「昨日の襲撃について意見を聞きたいという口実で会いに行きます。敵の一昧なら私が来たことで動搖し、何らかの反応があるでしょう。シャドウデーモンにそれを観察させます」

「お前にしては回りくどいやり方だな。忍び込んでそいつを魔法で尋問しないのか?」

「それも考えましたが……」

ナーベラルも本当はそうしたかった。

しかし、今回の話がただの勘違いで、大隊長を尋問してシロだつた場合は至高の御方が出向いて相手の記憶を消す必要がある。独自に捜査中という偉大なる御方の手を煩わせるのは最後の手段にしかつた。

「確度の低い情報ですので、今はこれでよいかと」

「そうか……。まあ、やつてみろ」

「はつ！」

作戦に許可が出たことでナーベラルは安堵した。

「め、面会のご予約はござりますか……？」

警備兵は恐る恐る聞いた。

「ないわ」

平然と言うナーベラルに彼は閉口したが、しばしお待ちを、と言つて屋敷へ入り、しばらく経つと白髪の使用人がやつてきた。

「旦那様がお会いになるそうです。ですが、腰の剣をお預かりさせて頂くことは可能でしょうか？貴女様のご高名は重々承知しておりますが、当家の規則となつておりますので」

腰を低くして頼まれてナーベラルは一瞬苛立ちを感じたが、剣くらいいなら問題ないだろうと判断した。

「氣をつけて保管しなさい。大事なものよ」

「もちろんでござります」

使用人に案内され、ナーベラルは応接間へ赴く。

「しばしお待ちください。旦那様は身支度を整えております」

細かな細工を施した調度品に囲まれ、恍惚となつた接客女中に出さ

れた飲み物に手をつけないまま彼女は待つ。

（シャドウ「デーモンから連絡がないということは今のところ怪しい行動はないということ……）

自分が出て行つたあとで誰かに連絡する可能性もあるが、やはりあの魔術師の勘違いだつたのでは。ナーベラルはそう思い始め、小柄の魔術師に殺意が沸く。

その時、扉が開いた。

ひよこつと頭を出したのは大隊長、ではなく5歳ほどの男の子だった。

彼女を見てにつこりと笑う。

人間なら愛らしいと思うだろうが、ナーベラルはただイラつくだけだ。

「何？」

消えろ、と彼女は言おうとしたが、子供はたたつとテーブルの向かい側へやつてきて片手を上げた。

その手には白い筒が握られている。

片端には紐がついていた。

ナーベラルはその道具を見たことがあつた。
殺戮の道具に少年は手をかける。

「つ――！」

彼女は一瞬の中で考えた。

（魔法で拘束――間に合う？――対策されてたら――剣で腕を斬り落

――）

彼女はさきほど使用人に何を預けたのか思い出す。
少年が紐を引く直前、彼女は転移した。

部屋のあちこちからぽつぽつと零が落ちる。

一度氷結した天井や調度品が再び溶け始めているからだ。

その中で同じように手からぽたぽたと零を垂らす人形のようなものがあつた。

かつて子供だったモノだ。

「鍊金術師が作る氷結爆弾にここまで威力はありません。魔法をかけて強化したのでしょうか」

検証した兵士は言つた。

「そう……」

どうでもいいと思いながらナーベラルは答えた。

すでに日は暮れているが魔法の照明のおかげで高級住宅街は明るさを保っている。大隊長の屋敷には大勢の兵士がやつてきて屋敷の者たちを事情聴取していた。

AINZはとりあえず兵の取調べに応じろと命じた。大隊指揮官の息子を殺害したと思われかねない状況だつたからだ。幸い、名声を高めたおかげで兵士たちは彼女を疑う様子はなく、むしろ情報を提供してくれる。

(どういうことなの?)

ナーベラルは途方にくれる思いだつた。

転移直後に彼女は問答無用でヒムナルに魔法をかけて尋問した。もはやクロ確定だと思つたからである。しかし、シャドウデーモンが不審な行動を発見できなかつたことが示すように彼はシロだつた。昨日の襲撃もさきほどの攻撃もまつたく知らないと言つた。使用者と警備兵もまた同様であつた。

子供はおそらく魅了にかけられていたのだろうと彼女は考える。幼い人間なら自殺的な行動も簡単な嘘で誘導できる。しかし、屋敷のものが全員シロなら誰が子供に魅了をかけ、特殊な鍊金術武器を渡したものか。

(私は何かを見落としてる。でも、何を……)

彼女がそう思つたとき、女の悲鳴が上がつた。

見ると部屋に入つてきただばかりの女が凍つた死体にすがりついて泣いていた。おそらく母親なのだろう。神官が彼女を慰め、その隣では男がうなだれている。彼がヒムナル大隊長だつた。

神官は死体の前に座ると治療とは別の祈りを捧げ始めた。
偉大なる神々よ、彼の魂をお導きください。

かの地で安息と安寧をお与えください。

この地で最後までお仕えし、息絶えた者が救済されることをお許しください。

それは違うだろう、とナーベラルは思った。

お前たちに神はない。

なにしろお前たちは神の顔も名前も知らないのだから。虫と同じように繁殖するだけだ。

虫なら私たちに踏まれないことでも祈ればいい。

不快さが増してゆく中で脳内に声が響いた。

「ナーベラル、答えなくていいからそのまま聞け」

彼女にとつて神の声そのものだつた。

周りの目も気にせず、片膝をついて傾聴する。

「お前に情報提供した奴だが本当に敵の仲間ではないのか？もう一度だけ考えてみてくれ」

AINZはそれだけ言つて魔法を解除した。

ナーベラルはすぐさま不安になつた。

彼女もある魔術師に誘導された可能性はすぐに考えた。

というより、それがもつとも納得できる答えだ。

しかし、3人が敵の仲間なら昨日襲撃後に話していたことと矛盾する。

「襲撃の犯人は誰か」などと会話するはずがない。

（でも、AINZ様がそう仰つたということは私が間違つてているのよ。

あの3人は…………3人？）

彼女は啞然とした。

自分は何を間違えていたのか。

「救いようのない愚か者ね…………」

周囲はナーベラルの言葉を聞いたが、その意味を問うことはできなかつた。

直後に彼女が転移したからだ。

ナーベラルはドアノブを掴む。

鍵がかかっていたが、腕力でこじ開けた。

シャドウデーモンが先行し、部屋がどういう状況かは確認済みだ。中に入ると血の匂い。

短髪の男と筋肉質の大男が床で絶命していた。

「情報は残さないというわけね……」

怒りと殺意の詰まつた声。

単純なことだつた。

彼らは襲撃の犯人は誰だろうと話し合つたのだから演技でもない限り3人は犯人の一味ではない。3人全員ならそう考えてよい。

1人だつた。

ワーカーのうち無関係だつたのは2人だけ。
あの男がこの街に潜むスリーパー。それだけの話だつた。
(あの時、魅了をかけていれば……)

ナーベラルは最後に話した時の顔を思い出し、苦しめて殺す方法を何通りか考えた。

「当然だが、逃げていたな」

転移してきたAIN兹を見て彼女は跪く。

「申し訳ありません！私が愚かな思い違いをしたばかりに！」

額を床につけ、謝罪するナーベラル。

死を命じられれば躊躇なく実行するつもりだ。

自分でも自分が許せなかつた。

「よい。謝罪よりこれからどうするかを考えるべきだらう？」

AIN兹の声に怒りはない。

それが返つて恐ろしかつた。

「はっ！奴の顔をはつきりと見てるので――」

「ロケットクリーチャーだな？それしかない」

AIN兹は先を続けた。

生物探知の魔法、ロケットクリーチャー。

ロケットオブジェクトが物品を探知できるのに対してもちらは知つてゐる生物の位置を探知できる。うろ覚えでは使えず、ンフリー・レアの時は髪のせいで顔全体が見えないと特殊な事情があつたため使えなかつたが、今回は使用可能だ。

AINZは巻物を取り出し、ナーベラルに渡す。

彼女はそれを受け取り、少し待つ。

AINZは立ったまま動かない。

「AINZ様、探知魔法へのカウンター対策もするのでは？」

「ちゃんと覚えているようだな」

AINZは満足したように言い、それらの巻物を取り出し始めた。ンファイアレアの一件とほとんど同じ手順を彼女は繰り返すと最後にロケットクリーチャーを使用する。

「ここは……地下水道のようです」

クリスタルモニターに映つた男を見てナーベラルは言つた。

「そうだな……街の外に逃げたと思ったが……ふむ……」

AINZはしばらく沈黙した。

「ああ」

AINZは何かを納得し、うなずく。

「ナーベラル、こいつがここにいる目的はなんだと思う？」

「罠です。探知されるのを見越したうえで私を誘い出そうとしているのだと思います」

「だろうな」

AINZもすぐ同意し、彼女は安堵する。

今までの襲撃と同じだ。待ち伏せし、罠を仕掛け、殺す。

ナーベラルもこれだけ繰り返されれば気づく。

「罠なのだから本来は入らないのが一番だが、これをお前への試験にしたい。ナーベラル、お前は罠を打ち破つてこいつを捕獲することができるか？」

試されているとナーベラルは信じた。

「……はい」

彼女は少し考えて覚悟を決める。

罠を看破し、敵を自決させずに捕獲する。

得意分野ではないが、困難という程度で怖気づくナーベラルではない。

この程度もできないなら死ぬべきだと思つた。

「可能です、アインズ様。必ずやこの羽虫を生け捕りにしてご覧に入れます」

「一応聞かせてくれ。どんな手段をとるつもりだ?」

「はっ!念のために――」

彼女はたった一人の人間相手に普段なら決して使わない方法を伝えた。

臆病とさえいえる手段だ。

「お前にしてはまずいぶん慎重だな」

「まずいでしようか?」

「いいや、少しも悪くないぞ」

アインズは嬉しそうに言つた。

暴かれる偽り

陽光がまったく届かない世界。

そこにも流れてくる下水の栄養を吸収する奇怪な虫たちがおり、それを食らう小型の動物たちがやつてくる生態系が形成されていた。シユラはその王国に潜んでいた。

時々、足の上を気味の悪い虫が這いまわり、裾から入つてくるのが彼は気にもならない。奴隸時代にはもつと悲惨な状況で暮らしていたのだから。

いつナーベが来てもおかしくない、と彼は思う。

大隊長の屋敷へ誘導されたことに気づき、宿を急襲するがすでに自分は逃亡済み。そこで彼女は生物探知の魔法が使えるならそれを使い、あるいはワーカーたちの部屋にあえて残した情報に気づけばここへ来るだろう。首領の情報を持つ可能性は低いとわかついてもゼロでない以上は捕縛を試みる。

転移の魔法で奇襲をかける可能性は低いと彼は考えている。罠を散々繰り返したのだからむこうはこれも罠だと気づく。転移すればそれを起動条件に設定した罠が作動すると推測するだろう。実際、そのとおりだ。

であれば、彼女は罠探知の魔法かマジックアイテムを使用しながらそれらをすり抜け、あるいは解除して接近している頃だろう。それでも想定済みだ。見つかることを前提にした罠をいくつも設置している。最大にして唯一ナーベを殺せる望みのある罠は彼のすぐ傍にあつた。探知の魔法でも見破れないそれはどんな防御魔法でも防ぎきれない威力を持ち、彼女の命を奪う。

（まさかと思うけど、私に誘導されたと気づかないとことはないでしようね？）

彼は少し不安になつた。

このまま待ちぼうけになるだけは想定していない。

美姫ナーベがそこまで愚鈍では困る。

彼女が最初の襲撃で自分とワーカーたちの前に現れた時は自決を

覚悟したが、2人が犯人を推測し始めたおかげで3人も潔白だと彼女は信じ込んだ。これは非常に嬉しい誤算だった。

おかげで彼の仲間が大隊長の息子に魔法をかけ、魅了の効果が持続している間にナーベを屋敷へ誘導することができた。黒の五番は彼女と話しているとき、いつでも自決できるよう準備していたが、拍子抜けするほどあつさり騙された。

しかし、子供を利用した不意打ちでも死なないのはさすが最高位冒険者ということだろう。

「黒の五番、聞こえる？」

伝言の魔法により脳内に女の声が響く。

「黒の四番。どうしました？」

彼女は彼と同じ貴族に飼われていた奴隸であり、当時の仲間で唯一生存している者だつた。今回の作戦に加わつてると知つたのは数時間前だ。

「最後に言つておきたいの。あなた、囚になるつてことは顔がばれてるのね。今回で引退でしよう？」

引退。

その意味は黒の五番にもわかつた。

彼ら暗殺団は手配書が国中に回れば実行犯としてもスリーパーとしても活動できなくなるために顔が割れたメンバーは国外へ逃亡するしかない。そのまま暗殺者を辞めて新しい人生を探せ、と訓練時代に言わされたことがあつた。

小規模な事件ならほどぼりが冷めた頃に復帰できるが、最高位冒険者を殺害すれば前代未聞の凶悪事件として冒険者組合と王国軍が死に物狂いで彼を追いかけるだろう。彼はこの任務が成功してもしなくても暗殺者として終わりだつた。

「私が引退したら帝国のどこかで暮らすつもりよ」

「何を言つてるんです？」

彼は相手が精神支配を受けた可能性を疑う。

しかし、相手は続けた。

「操られてないわ。生き残れて縁があればまた会いましょう。それだ

けよ」

相手はそう言つて魔法を解除した。

黒の五番はぼんやりとだが意図をつかむ。

お互い暗殺者を引退できたら会わないかということだ。

帝国といつても広い。帝国のどこで、と言わないのはそこまで言つたら罠にしか聞こえないからだろう。

（暗殺者をやめた後の人生。そんなものが――）

彼は馬鹿げた思考を慌てて中止した。

任務中にくだらない事を考えてどうする。

その時、彼の手の中にいる動物がもぞもぞと動いた。來た、と彼は思つた。

その直後、二つの事象が生じた。

黒の五番は懷から黒い塊を取り出すと右側に投げた。

同時にそちらの方向から不可視の何かが投じられた。

彼が投じたものは鬼火の粉末ハウダーラ・オブ・ウイルオウイズブを周囲に飛び散らせ、空中に浮く美貌の魔術師を浮かび上がらせる。

逆に、投じられたものは彼に当たつて薄く固い容器が割れ、内部の液体により彼の体に魔法効果が生じ始めた。

（これは……ディレイドバイズン毒物遲延のボーション！）

よほど強い神官にかけられたであろうその魔法は呪文抵抗を許さなかつた。この瞬間、彼は一時的な毒への完全耐性を得てしまい、呪文の持続時間が終わるまで毒物で自決できなくなつた。

「やりますね」

彼は刃物を構える。

「……っ」

舌打ちが下水道に響いた。

（モモンがない……）

彼は挟み撃ちを警戒する。

といつても、下水道は大剣を振れる空間がなく、モモン用にマジックアイテムも用意しているので勝算はある。

「どうしてわかつたか不思議ですか？」

彼は掌に収まつた動物を逃がす。

闇の世界でも周囲を認識できる動物、蝙蝠だ。

ドライドが訓練したものを受けた。

「あつそ。『人間種魅了』」

彼女は即座に魔法をかけたが目に膜はかかるない。

彼は対策済みだった。電撃^{ショッキンググラス}の手など低威力の電撃魔法に備えて電気属性無効化のマジックアイテムも装備している。

「麻痺や睡眠も試したらどうです？ 効くかもしませんよ」

その挑発に相手は剣を抜いた。

（もう毒は使えない。最短で自決するには自分の首を切るしかない。相手はそれを防ぐためにこちらの腕を切り落とす。ここまででは予想済みですが……）

彼はもう少し近づいてくれと願った。

「私が近づいてそここの罠にかかると思ってるの？」

剣が指した先は汚れた下水。その下には確かに罠が設置してあった。

「……されましたか」

黒の五番は何もかも終わつたという顔をした。

それでも彼は陶器を床に投げつける。

炎が生まれ、闇の世界が赤く染まつた。

炎は生物のようにうねり、白い美貌を包み込む——ことはなかつた。

転移魔法。

雪から作つたような美貌が目の前に現れ、光が一閃する。
死ぬほどの激痛と共に彼の右腕が床に落ちた。

「ぎ……」

黒の五番は人生最大の痛みに耐える。

同時に歓喜した。

「起動！」

彼は叫び、身につけた2つの装備にこめられた魔法が同時に発動した。

一つは『次元の移動』。

もう一つは鉱山採掘に使われる魔法、『土石軟化』

ぴしりと天井や壁が鳴り、彼の姿が消えた。

彼が立っていた場所は事前にドルイドである仲間が魔法をかけて下水道の基礎構造を弱らせておいた。たった今追加した魔法により地下空間が耐久限界を超えたのだ。

「な……」

美しい声と姿は数百トンの土砂の下敷きとなつた。

「成功。死体を頼みます」

怪我をポーションで治療し、地下下水道を走りながら彼は黒の四番に魔法で伝えた。

仮に魔術師ナーベを殺害しても死体が綺麗に残つていると王都のアダマンタイト級冒険者が蘇生してしまう。そのためには必要な処置だつた。

「わかつたわ。任務終了おつかれ」

相手の声に安堵があつた。

「さよなら。いつか帝国で会えたらしいですね」

彼は自分の口からその言葉が出たことに驚いた。

「……ええ、いつか会いましょう」

会話はそれで終わつた。

彼女が生き延びて引退できる保証はない。

自分も逃げられる保証はまだない。

それでもよかつた。

シユラは伝言の魔法を終えると息を切らしながら地下下水道の出口から出てきた。途中でモモンと鉢合させしないか気が気ではなかつたが、どうやら別ルートだつたらしい。

下水の匂いを夜の清涼な空気が追い払い、今だけは達成感に浸ることを自分に許す。生涯最大にして最後の仕事をやり遂げたのだ。

仲間たちの死も報われる。

彼らに短い祈りの言葉を唱えようとしたとき、空から声が聞こえ

た。

「無駄な努力、ご苦労様」

「……え？」

彼が見上げると夜の女王がそこにいた。

先ほど見た白い美貌と黒い瞳。

その後ろでは世界最高の美姫を映やさんと大きな月が空を飾つて
いる。

恐ろしく、そして美しい光景だつた。

「……どうして」

転移する余裕はなかつたはずだ。

そう言いたかった。

「どういう罠かいろいろ考えたけど、結局、どうでもよかつたのよ。最後
だから教えてあげる。あなたが地下で戦つたのは私じゃないわ。
幻術よ。自分が騙される側になるとは思わなかつた？」

「馬鹿な……あれは幻術じやない……鬼火の粉末が……」

彼はすがるように言つた。

地下下水道を崩落させても相手が幻術なら無意味になる。
だからこそ最初にマジックアイテムでそれを確かめた。

しかも腕を切られたということは実体があるということだ。

夜の女王は地を這う虫を見るような目をした。

「実体を持つ幻術もあるのよ。第8位階のシミュレイクラム。知らな
いの？」

「……8位階？」

彼はその言葉の意味を考える。
神話の中の魔法。

人類がそこに到達したことはない。

ならば今、自分は神の一人と対峙していることになる。

「実体を持つし、戦闘も行える。強さが私の半分になるのが欠点だけ
れど、あなた達が手も足も出なかつたのは笑えるわ」

「……半分？」

彼はまたオウム返しに言つた。

あの恐ろしい魔術師が半分の強さ。

そんな話はありえない。あつてはならない。

(あなた……達?)

彼はほとんど絶句しながらも奇妙な点に気づいた。
さきほどの戦いなら「あなた」ではないのか。

彼の頭脳は困惑し、そこに稻妻のごとき閃きがやつてきた。

「まさか……あの時から……」

彼の体は震えていた。

「そう。あなた達は最初から騙されていた。裏通りや人が少ない所へ
私は行かないの。そういう命令を受けてるからよ」

夕焼けの中、6人の仲間が殺されていつた光景を彼は思い出す。
あの殺戮も本物のナーベではなかつた。

強さが半分の偽者だつたというのか。

偽り、騙し、虚を突く自分が最初から騙されていた。

「あなたは……誰なんですか……?」

彼は放心しながらも聞いた。

「違う……誰か、じゃない……あなたは何なんですか……人間とは思
えない。もつと別の——」

その続きを彼が言うことは許されなかつた。

夜の女王は消え、死ぬほどの激痛が生まれたからだ。
首を下に曲げると胸から突き出た刃が見えた。

真後ろから鈴を転がすような笑い声。

「さきほど至高の御方から素晴らしいお言葉があつたわ。首領は捕ま
えたからもうお前を殺していいそうよ」
剣が引き抜かれ、彼は地面に倒れた。

心臓を貫かれていた。

天の星々と美姫が見下ろす。

彼は血を吐きながら口をパクパクと動かす。

「何?聞こえないわよ?」

美姫は嗤っていた。

「に……」

「に？」

そこで彼女は少し体をかがめる。

死を願っていた相手を実際に殺せることへの喜び。

それがナーベラル・ガンマに一つのことを失念させた。

目の前の虫に一つだけ武器が残っていたことに。

黒の五番は彼女のロープを掴んで引き寄せ、口内に溜めた毒を吹きかけた。

美姫の顔が驚きに変わる。

任務完了。

彼はそう信じて死の国へ旅立つた。

満月の中を小さな影が舞う。

自由を手に入れた彼の蝙蝠だった。

地面が震え、鈍い音が街に響いた。
急がないと、と黒の四番は思う。

魔術師協会所属の者たちがやつてくる前に魔術師ナーベの死体を見つけ、蘇生不可能な状態にする必要がある。

地面の中を泳げるアースエレメンタルの一種を召喚すべく彼女は精神を集中させる。

その時だつた。

（自決用の毒を――）
ニュートラライズボイズン
ドミニネイトパーソン

体に魔法がかかつた。

（自決用の毒を――）
ドミニネイトパーソン
消されたと彼女が理解した瞬間、もう一つの魔法がかかつた。

『人間種支配』

精神が自分とは別の何かで埋まつていく。

「死体を回収する仲間が必ずいると思つたぞ」

背後から憎しみのこもつた声が聞こえた。

これから自分をどうする気なのか容易にわかつたが、体が震えることは許されなかつた。

「ご苦労だつたな、ルプスレギナ。すまないが用はこれだけなんだ。

ポーションはもつたいないし、手を血で汚すのが嫌でな」「とんでもございません。どのような御用でもお呼びください」

優しく、そして誇り高い女の声がした。

「まずは場所を変えよう」

そう言うと視界が突然森に変わった。

草木の香りと虫の音が幻術でないことを彼女に教える。

細すぎる指がその首をつかむと「回れ右」をさせて相手の顔を見せてくれた。

蛹よりも白い骨。赤い光が灯る眼窩。

相手が人間でないことに彼女は驚かなかつた。

「崩落場所の近くに待機したのは失敗だと思っているか？」

「はい、そうです」

意志なき声が答えた。

「遠くにいても意味はなかつた。街のあらゆる場所を部下が監視しているのだからな。さて、大事な質問だ。お前は暗殺団の頭領か、あるいはその居場所を知つていてる者か？」

「いいえ、違います。私はそういう情報を持たされていません」

少しの沈黙があつた。

「あー、やつぱりそうだよな……」

うんざりした声が漏れた。

「そうだよなー。捨て駒を使うよな。もはやアウラの捜索に期待するしか……」

「アインズ様ー！」

幼く活気のある声が夜の森に響いた。

それに続くいくつもの足音。

彼女は見た。

モンスターの大群を。

大型から小型、靈体らしき存在もいる。

百や二百ではない軍団規模の数だ。

先頭には幼いダークエルフが一匹の魔物に乗つており、その上空にはいくつも目を持つた奇怪な肉塊が4つ浮いている。

「おお、アウラ！見つけたのか?!」

骸骨は喜色のこもつた声で聞いた。

「西のほうでこんな奴を見つけました」

ダークエルフがそう言うと魔物の口からペッと吐き出された大きな物体。

緑のローブをまとつた老人だった。

「アウラ、支配の魔法をかけたから麻痺を解け。おい、お前は誰だ？ ナーベを襲う暗殺団の首領か？ そななんだよな？ 頼むからそうであつてくれ」

ほとんど哀願に近い問いかけに老人はゆっくりと口を開いた。

「……そうだ。私は暗殺団「名無しネームレス」を率いる首領、ウイジュラだ。ナーベ暗殺の指揮をとっている」

彼女は驚いた。

その声は紛れもなく首領のそれだつたからだ。

暗殺団のすべてを知る首領が捕まつた。

それはすべての終わりを意味していた。

「おおおおっ！ 大手柄だ、アウラ！ よくやつた！」

「お、お褒め頂いて光榮です、AINZ様！」

ダークエルフと共に子供のように喜ぶ骸骨を見て、彼女は一瞬だけ彼を人間みたいだと思った。

「でも、AINZ様、どうしてこいつが森の中にいると思われたのですか？」

「ああ、それは単純なことだ。人間同士が使う伝言の魔法は距離が離れると聞き取りにくくなるらしい。だから街の暗殺団に指令を送るならなるべく近い場所にいると思つたのだ。比較的近くの山か森に潜んでいるとな。エ・ランテル内にいる可能性もゼロではなかつたが、住人でない者がいればやはり目立つだろう？」

「なるほどーー！ さすがAINZ様！」

ダークエルフは目をきらきらとさせている。

「いやいや……結局はナザリックで動かせるモンスターを総動員したただのローラー作戦だ。こんな雑魚集団のために配下の半分以上を

動かすとかありえんぞ……」

骸骨は陰鬱な声を出した。

地面に横たわる黒の四番にも状況がわかつてきた。

伝言の魔法が正確に伝わる範囲を探す。言葉にするのは容易いが、実行できる人間などいない。探知に優れた魔術師が100人以上、そして自由に動かせる軍団規模の人員がなければその発想すら出ないだろう。目の前の骸骨は魔物の軍団を使い、そんな単純かつ無茶苦茶な人海戦術で首領にたどり着いたのだ。

こんな集団と手を組むモモンとナーベは何者なのか。彼女は最高位冒険者といわれる二人には暴いてはいけない裏の顔があると理解し始めた。

「このモンスターたちもすぐ役に立ちましたよ！」

ダークエルフは上空の肉塊を指した。

「探知系ならこいつらが一番いいからな。偽装は巧妙だつたか？」

「いいえ、潜伏自体は全然たいしたことありませんでした。場所さえ絞れていれば簡単に見つかつたと思います」

「ああ、やはり鶏を裂くのに牛刀を使つた感が……あとで全員に礼を言おう。他に展開しているモンスターたちに帰還するよう言つてくれるか？」

「畏まりました！ところで、アインズ様、そこの人間はなんですか？」

ダークエルフは道端の石を見るように黒の四番を見た。

「ああ、こいつか。もう用はないな」

赤い光に見つめられ、彼女は自分がどうなるか直感でわかつた。首領は捕まり、依頼主も残りの部下たちの居所も全てばれるだろう。

すべて終わつたのだ。

（あいつ、逃げられたかな……）

最後に言葉を交わした仲間を想い、彼女の意識は消えた。

真実とその裏側

「まったく馬鹿げた事件だつた」

暗い市道を歩きながらAINZは言つた。

敵の首領からは必要な情報を全て引き出し、本来ならナザリツクの拷問部屋送りにするところだが、モモンとナーベが暗殺団の首謀者を逮捕したと人間たちに示すため、エ・ランテルの衛兵に彼を引き渡した。今はその帰りだつた。

「さて、お前は事件の背景がわかつたか？」

AINZは首領の尋問に立ち会わなかつたナーベラルに尋ねる。

彼女は魔法の照明を持ち、主君の影を踏まぬよう気をつけながら歩いている。AINZもナーベラルも闇を見通すスキルを持つが、周囲に怪しまれないための偽装だつた。

「申し訳ありません。未だにわからないこの愚か者をお許しください」

彼女は霸氣のない声で言つた。

意氣消沈しているのはハエに等しい弱小の敵に最後の毒攻撃を許したからだつた。

死に際に放たれた毒の息は装備の力で無効化され、何の意味もなかつた。たとえその装備がなくともナーベラルのレベルなら毒に抵抗できただろう。それでも彼女は油断した自分が許せなかつた。

「いくら考へてもわからぬだらう。あいつらの目的はお前の暗殺ではなかつたのだから」

「ど、どういうことでしようか？」

彼女は世界一の難問に出合つた顔になつた。

「いや、これは正確ではないな。暗殺できるに越したことはないが、敵の首領はほとんどあきらめていた。その上で別の目的があつてお前を狙い続けていたのだ」

「お許しください。私にはそれが何なのかまったくわかりません」

「名声だ」

AINZは言つた。

「名声、ですか？」

「敵はお前の最高位冒険者としての名声を落としたかったのだ。まず襲撃事件そのもので変な噂が立つてしまうだろう？そして娼館で行われていた変な商売も奴らの工作活動だ」

「あれも関係していたのですか？」

ナーベラルは目を大きく開く。

「そうだ。ところで、地下下水道の崩落で真上にあつた建物があの娼館だったのは知ってるな？今、救助活動が行われているがかなり死んだだろう。それを命じた首領を私たちが捕まえたからよいが、そうでもなかつたら市民は誰を疑つていたと思う？」

「それは……私ですか？」

人間の機微がわからないナーベラルにもそれくらいはわかつた。昨日の今日だというのにあの娼館の秘密の商売は街中の噂になり、彼女がどれだけ腹を立てていてるかも（尾ひれがついたうえで）広まつているのだから。

「そうだ。お前は自力で娼館の秘密を暴いたが、そうでなかつたら匿名の密告がされる予定だつた。娼館潰しの噂が出ればさらに名声が落ちただろう。大隊長の屋敷での襲撃もお前を子供殺しの犯人に仕立て上げようという試みだつたのだ。さすがにこれは上手くいかなかつたし、奴らも大隊長がお前を糾弾すれば儲けものくらいに思つてたらしい」

「そんな目的が……」

ナーベラルは想像さえしなかつた目的に驚くばかりだつた。

「では、そこまで私の名声を落とそうとする理由は何だつたのですか？」

「わからなくとも仕方ない。暗殺の依頼主はシユトランド伯爵という聞いたこともない貴族だ。昨日、組合でブルムラシュー侯の息子がお前に惚れ込んでいるという話があつたのを覚えているか？」

「はい」

人間の名前をなかなか覚えられないナーベラルだがそれくらいは覚えて いる。

「その息子と婚約手前まで話を進めていた女がいたんだ。名前はシャンテだつたか？彼女の父親がシユトランド伯爵というのだ」

「娘の父親……まさか……」

ナーベラルは頭が痛くなりそうな真相が見えてきた。

「そうだ。もうすぐ大貴族の親戚になれるという段階で急に話がなかつたことになり、その原因を探つたらお前に辿り着いたそうだ。あの暗殺者たちはシユトランドが保有している諜報暗殺部隊だつた」「婚約の邪魔だつた。それだけの理由ですか？」

ナーベラルにはまつたく理解しがたい話だつた。

そこまで馬鹿な虫がいるとは思わなかつた。

「アインズ様、もしよろしければ……」

ナーベラルはそこで言葉を止めた。

「どうした？」

「……いいえ、お忘れください」

「その貴族は自分に始末させてほしいのだろう？」

ナーベラルは少し躊躇したが「はい」と答えた。

「すでにシャルティアとソリュシヤンを伯爵の屋敷に向かわせていいる。今回のお礼は二人がしつかりやつてくれるから我慢しろ」「あの一人ですか。それならば……」

ナーベラルはそこで溜飲を下げる。

あの二人ならば自分よりはるかに残忍な方法で復讐を遂げてくれるだろう。

「ブルムラシュー侯の息子を放置したせいでこうなつた。組合から強く抗議させておくが、それでもしつこいようならソリュシヤンにもう一働きしてもらうか」

「アインズ様……」

「ん？」

アインズはいつもにも増した畏敬の視線を感じた。

「アインズ様は組合で話を聞いたときからこの真相を見抜いておられたのですか？」

「…………ふふ」

AINZは少し沈黙して笑った。

「さてな」

「おお……」

その言葉を当然だと意訳したナーベラルは畏敬の念をさらに強くした。

（違うつて言わなくていいのか!?）

AINZは心の中で自分に言う。

（俺つて自分をどんどんまずい状況へ追い込んでないか？いい加減、俺には支配者の資質なんて何もないって言うべきじゃないのか？）

存在するはずのない胃が痛んだ。

罪悪感と不安を感じつつもそれはできないとAINZはわかつている。

彼女ら部下たちが必死に崇め奉る神の像を破壊してそこに何を建てるのか。社畜サラリーマンの像を立てていいわけがない。

もちろんこれは言い訳だとわかってる。みんなのためといいながら自分のためなのだ。

（俺は希代の詐欺師だな……あの首領よりもずっと臆病な詐欺師だ）

AINZはそう自嘲する。

「さて、ナーベラル。お前がさつき復讐しに行きたいと言いかけてやめた理由はなんだ？さつきから申し訳なさそうな顔をしているが」
ナーベラルは数秒、本来なら無礼とさえいえる時間を要して答えた。

「……私は昨日今日と醜態ばかり晒しました」

彼女は羞恥と無念が詰まつた声を出し、AINZの前に立つた。

「AINZ様、どうかこの愚か者に相応しい罰を！」

「反省すべき点はなんだ？」

AINZは尋ねる。

「はっ……。最初にあの虫けらを容疑から外したのが失敗でした。娼館では怒りを自制し、敵に情報提供された時も念のために魅了を使うべきでした。最後に羽虫を殺すときも一撃で首を刎ねるべきだったかと……」

「たしかにいろいろミスはあった。油断もあった。反省しているのだな？」

「はい」

「ならばよい」

AINZは明るい声で言つた。

「し、しかし、私は……」

「よいと言つたが気にするなとは言つていらない。失敗したのだからしつかり反省し、学習しろ。COOLERSにも同じことを言つた気がするが、完璧な者などいない。誰にでも失敗はあるさ。私でさえもな」

「畏れながらそれだけはございません」

NARVALは最後の部分だけを否定した。

「……いや、私でも失敗することはあるんじやないか？」

「それだけはございません」

彼女はまた否定した。

「いや、でも……まあ……そこは置いておくとして」

AINZの声に投げやりなものが混ざつた。

「人間」ときといつて甘く見ると危険なこともあるということだ。いい勉強になつただろう？お前が学習したなら今回の襲撃には万金を払う価値がある。それともお前はまた同じ失敗をしてしまうのか？」
「いいえ！」このような失態は二度とお見せしないことを誓います！」

NARVALはまさに命をかけてそう宣言した。

「よい返事だ」

AINZは破顔した。

「ところで、ここは街中だ。モモンさんと呼べ」

「も、申し訳ありません！」

彼女は深く頭を下げる。

なんでこれだけは直らないんだろう、とAINZは不思議に思つた。

月に見守られながら主君と従者は歩く。

NARVALはいくつもの失態をしてなお仕えることを許す至高の

御方に心から感謝し、そして何もかも見抜く智謀に今まで以上の畏れを抱いた。

心の中で祈りを唱える。

偉大にして至高の御方、これからも私たちをお導きください。
安息と安寧などお与えにならないでください。

この地で最後までお仕えし、息絶えることをお許しください。

「シユトランド伯爵ですが、王国軍が屋敷に捕縛しに行つたときには誰一人いなかつたそうです」

男の前で部下は報告した。

すでに伝言の魔法は送つていたが、直接の報告を省略したことは一度もない。

「奥方と娘、使用人の全てが行方不明です」

「国外逃亡したか？リーダーが捕まつて全て自白したとはいえ馬鹿なやつだ」

椅子に座る男は楽しそうに言つた。

「同感でござります」

本当に恐ろしい御方だと部下は思つた。

一度はブルムラシュー侯の息子を唆してシユトランド伯爵の娘と交際させ、今度はどうやつたのか魔法で描かれた魔術師ナーベの肖像画を手にいれて彼女に好意を抱かせ、間接的に縁談を中断させた仕掛け人は目の前の男だつた。

シユトランド伯爵が大貴族と繋がりを持つために大金を投じたことも私設の暗殺団を持つことも彼らは知つていた。縁談が滞つて彼がその理由を知れば何かの嫌がらせを魔術師ナーベにする可能性は高かつた。それこそが彼らの期待したことだ。

ブルムラシュー父子もシユトランドも自分たちが唆されたとは死ぬまで思わないだろう。

「ナーベ嬢はこの一件でなんと？」

「エフェンドラ様のおかげで大変な迷惑を被つたと手紙を送つたそうです」

「ははは！だろうな！」

豪勢な椅子の上で男は愉快そうに笑った。

「腐つても王国随一の財力を持つ奴ならナーベ嬢も興味を持つかと思つたが、期待のし過ぎだつたか」

「残念ながらそのようです」

これもまた恐ろしいと部下は思う。

もしも魔術師ナーベがブルムラシュー侯爵家に興味を持てば彼らと繋がりを持つ自分たちの利益になる。逆に、あの親子が嫌われようと自分たちに何の損害もない。話がどう転ぼうとよかつたのだ。

「次の一手を打ちますか？」

部下は聞いた。

「いや、この件は一度寝かせる。今回は馬鹿な貴族たちのおかげでモモンとナーベが王国貴族全体へ嫌悪感を抱いてくれたなら良しとしよう。ご苦労だつたな。下がつてよい」

男は部下を下がらせるとシユトランド伯爵に関する一切の情報が書き込まれた書類をくずかごに放り込んだ。

机の上にある別の書類を手に取る。

モモンとナーベ二人について書かれた書類だつた。

「このチームの規格外の実力と実績。まさに人類の守護者にふさわしいな。いつかこちらに招聘したいものだが……にしてもなんと美しい」

彼は魔法で書かれた美姫の肖像画に恍惚となる。

「おつと、見惚れている場合ではないな」

彼は中断していたドワーフ王国との貿易について思考を戻し、書類を探す。希少鉱石の価格高騰に頭を悩ませているのだ。これに比べれば王国とあちらに誕生した最高位冒険者への工作活動など小さな案件だつた。

バハルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エル＝ニクスの脳内に使い捨てた王国貴族の名前はすでになかった。